トピックコード	**301**
トピック題名	**「楽しいお金の増やし方！　ファンドマネジャーと語ろう資産運用のポイントとアイデア」**
話題提供者	**チーフマネジャー　長谷川　美佳　先生/チーフファンドマネジャー　村松　祐介　先生**
所属組織	**三菱 UFJ アセットマネジメント株式会社**
参加生徒数	**51 名**

トピック内容等

　中 2 から高 2 まで、多くの生徒が集まるトピックとなった「楽しいお金の増やし方」。
生徒は課題として、事前に株式や NISA の話を親御さんに聞いており、家での資産運用の話をチーム内発表するところから始まった。

　資産運用のポイントを説明したところで、実際にやってみましょうと、資産運用のデザインゲームをチームで相談しながらプレイした。どのチームが最も資産運用が上手にできるのか、サイコロによる情勢の変化や運要素も絡みながら、このゲームはおおいに盛り上がった。

　資産運用にはうまい話（必ずもうかる）はない。自身のお金をリスク分散しながら、長期のプランで考え、着実に積み立てていくか、これが今回の3つのポイントであり、ゲームに盛り込まれた大切な要素であった。
ゲームを通じて、お金の話は生徒の記憶に強く残っただろう。

生徒の感想

・昨年に引き続き参加させていただきました。昨年よりも積極的にゲームに参加することができたので、学びのある時間になりました。ゲームの結果も昨年より良くなっていました！サポートしてくださったおかげでモヤモヤを解消しながら受講することができてうれしかったです。いただいた資料ももう一度家で読み直したいと思います。
・将来投資するかもしれないので投資についていろいろ知ることができてすごくよかったです。父が投資信託を結構やっているので普段から投資の話はよく耳にしていましたが、細かいところは知らなかったので知れてよかったです。また、長期、分散、積み立てを意識して今後に生かしていきたいです。資産運用ゲームでは、現実に似た状況で資産運用していくのが楽しかったです。

写真

トピックコード	**302**
トピック題名	**「戦没者遺骨の身元特定について」**
話題提供者	**山田　良広　先生**
所属組織	**神奈川歯科大学　法医学講座　歯科法医学分野　教授**
参加生徒数	**26 名**

トピック内容等

法医学の話から始まり、DNA 鑑定の手順を説明された。実際の事件を例に、DNA から犯人を特定し、事件解決に向かう様子を紹介され、非常にわかりやすかった。法医学や科学捜査研究所を題材にしたドラマは見るが、犯罪捜査のリアルを知ることができた。テーマの戦没者遺骨の身元特定について、厚生労働省とともに遺骨を遺族や国元に返すことを目的として実施していること、骨とくに歯から判定することを説明された。

生徒たちは DNA 鑑定で判ることや現状を興味深く聞いている様子だった。医療系・歯学部系を志す生徒には大変有意義な講義であった。

生徒の感想

・今日のトピックは遺伝子や DNA にかかわる話でそういう話ををよくニュースなどで見るのでとても疑問に思って応募しました。そして政府が回収した遺体などは 240 万柱あってその半数もまだ回収できてないと知り驚ました。また、DNA は一つではなくミトコンドリアにも別の DNA があると知って人間の体は複雑だけどおもしろいなと思うことができました。他にもとある 1 説として紹介してくれましたが、ミトコンドリアは人間に寄生しているという説を言われそれが立証されたらすごいと思うと同時に恐怖の感情も出てきそうです。なぜなら、どこからどのルートで体の中に入ってきたのかわからないしまた、それが体中に巡っていると考えるとすこしぞっとするからです。けど、DNA のことを少し知ることができてよかったです。

・法医学部のことや神奈川歯科大学のことについて詳しく知ることができた。最近の DNA 検査では髪の毛一本で身元の特定ができることを知りとても驚いた。40年でここまで進化した技術は他にはないと思った。ロシアなどの寒い地域では身元の特定は簡単だが南方のラバウルなどでは難しいことを知ることができた。法医学にも興味がわき神奈川歯科大学のホームページも見ようと思った。

写真

トピックコード	303
トピック題名	「「みんな」って誰？「普通」って何？　～差別・排除について考えてみよう」
話題提供者	髙橋　薫　先生
所属組織	昭和女子大学国際学部国際日本学科　　専任講師
参加生徒数	19 名

トピック内容等

今までと異なる視点で物事を見ることができるようになることを目的に、意識的バイアスおよび無意識のバイアスについて学び、それらの事実や排除の仕組み、そしてそれを知る意義について考えた。

「自分にとっての普通」が、他者にとっての生きづらさ（＝排除）につながる可能性を踏まえ、社会におけるマジョリティ性（構造的強者・優位・生きやすさ＝特権：努力ではなく偶然の環境によって自動的に受けられる恩恵）と、マイノリティ性（構造的弱者・劣位・日常的な生きづらさ）という構造を、意識的にとらえることを学んだ。

特権は「自動ドア」のようなものであり、それが開くことを当たり前と思っている人は、開かない場合（＝マイノリティ）の不自由さを想像しにくい。しかし同時に、その構造を変えるチャンスを持っているということでもある。

【生徒の様子】

講義内容は一見抽象的でありながら、実際には非常に身近なテーマであったため、生徒たちは集中して講義を傾聴していた。また、4 人程度のグループごとに問題に対する意見を活発に共有し、積極的な対話が見られた。

【この講座を受けて】

普段感じている、あるいは感じていない「差別・排除に対するもやもや」を言葉にしてその存在を明確に知れたことで「立ち止まって考えなおす力」「生きづらさを抱える人に気づく力」「未知の現実を想像する力」「決めつけ」から自由になることで「自分も他者も大切にできる力」を学ぶことができたのではないかと思う。

生徒の感想

・私は探究活動で、優しい日本語教育や多文化共生をテーマにしているので、今回のトピックには興味を持って取り組むことができました。私たちが感じられなくても日常生活の中に差別があふれているということを知れてよかったです。マイクロアグレッションのところでは、私はするほうもされたほうも覚えがあるので、身近に感じていることが言語化されてすっきりした気持ちと、なかなか意識して過ごすことは難しいなぁという気持ちが浮かびました。今後の探究活動にもいかしていきたいです。

・自分はこのトピックのタイトルにひかれて受けました。自分は外国で生まれ育って、今年日本に来たので、差別を受けたこともあります。それで、自分は絶対差別していないと思っていましたが、この授業を受けて、自分は日常生活で当たり前なことだ、これは常識外れだ、ただの考えすぎだとか思ってったことが、実は差別につながる考えだったとわかりました。無意識に決めつけたり、他の人を傷つけていたかもしれないと思ったら少し罪悪感がわいてきました。でもそれを生かして今後の生活で自分の言動に気を付けて、自分も他人も大切にできる力を身につけたいと思いました。

写真

トピックコード	**304**
トピック題名	**「UNHCR の難民支援と私たちにできること」**
話題提供者	**天沼　耕平　先生**
所属組織	**特定非営利活動法人　国連 UNHCR 協会広報啓発事業担当**
参加生徒数	**7 名**

トピック内容等

　難民と UNHCR について、『いのちの持ち物けんさ』のワークショップ、動画などを通して理解を深めた。
『いのちの持ち物けんさ』では、紙面に赤枠、青枠、黄色枠が記入されており、赤枠には「あなたにとって替わりのないもの」、青枠には「あなたにとって替わりのあるもの」、黄色枠には「そのどちらでもないもの」を考えて書き出した。その後、喪失の疑似体験として、青枠の物、黄色の枠の物が無くなったら…と想像し、皆で意見を共有した。赤枠の自分の「いのち」だけ残ったとしても生徒達は、生きる気力が無くなると気づき、そこから難民の気持ちを考えることができた。

　難民とは、紛争や迫害などで国境を越えて他国に助けを求めた人々のことで、帰国すると殺されてしまうため、母国に帰ることができない人々のことをいう。2024 年末時点で、世界で故郷を追われ、難民や国内避難民となっている人は、1 億 2320 万人と報告されており、シリア危機が始まった 2011 年から増え続けている。

　講師の方々から、そのような難民問題に対して私たちが『今』できることは、まずは『知る』。そこから『広め』、募金や活動に『参加する』、そして難民に『寄り添う』ことであると教えて頂いた。将来アフリカで教育支援をしたい、国際問題に貢献したいなどの具体的な希望をもっている生徒達も多く、講師からは『難民映画祭』、『ユースなんみんプラットフォーム』、『国連フォーラム』などの活動も紹介して頂いた。

生徒の感想

・いのちの持ち物けんさを通して、もし自分が難民になったら・・ということを考えることができ、いかに自分が難民のことを知らないのか、想像できていなかったのかを知ることができました。世界中には困っている人がたくさんいて、支援を必要としているのに全員に手を差し伸べることができていないという現状を目の当たりにして、難民支援の課題を少し知れたように感じます。今まで何らかの形で難民支援に関わってみたいとは思っていましたが、今回の講義を受けて、関わってみたいという気持ちが関わらなきゃだめだという気持ちに変わりました。自分に出来ることは本当に小さなことばかりですが、私たちが難民のことを知って、みんなに伝えて寄り添い、小さなことでも行動を起こすこと、それを大事にしたいなと思いました。ずっと興味があった国際機関の方のお話を聞くことができて、とても勉強になりました。今回の講義は、これからの私自身の行動や思考に大きく、良い影響を与えてくれると思います。

・今回の授業で大切なものがなくなる喪失感を紙を使って学ぶことができました。娯楽のようなものや生活に必要なものがなくなってしまうと自分のアイデンティティがなくなってしまったり何をすればいいのかわからなくなってしまいました。少し考えただけでも辛いことなのにそれが実際に起こっていると考えると少しずつでも支援に携わりたいと思いました。また、アフリカについてや難民についてあまり詳しくありませんでしたが今回の授業で多くの歴史や外交の知識を学ぶことができました。

写真

トピックコード	**305**
トピック題名	**「グローバル社会への第一歩：マレーシアでの 1 週間が私を変えたもの」**
話題提供者	**奈良 麻友美 先生**
所属組織	**CFF ジャパン 上智大学 法学部地球環境法学科 3 年生**
参加生徒数	**8 名**

トピック内容等

CFF ジャパンの活動で、マレーシアのスタディキャンプで児童養護施設を訪ねた経験と、人とつながり自分の世界を広げることの大切さを教えていただいた。奈良さんが訪れたマレーシアの福祉施設は、政府からの支援金がないため、自立・自給自足を目指しており、将来的に自立的な運営を行えるような仕組みづくりを大切にしていた。自分たちの支援先が置かれている状況を深く理解し、尊重したうえで自分たちにできる支援を考えることの大切さを教えていただいた。

また、マレーシアの無国籍集落では、この世に存在しない命として扱われている現状があること、法律は本来権利を守るためにあるが、一方で無国籍集落の人々からしたら自分の権利を拘束する足かせにもなることに気付いたことを共有していただいた。さらに、その活動には耳の聞こえない方も CFF 活動員として参加しており、現地の福祉施設の子供たちがオリジナルの手話を考えてくれたこと、活動のお礼に日本語の歌を手話付きで歌ってくれたことを紹介し、耳の聞こえない CFF 活動員がいたからこそ、言語を超えた心のつながりを得ることができたとお話いただきた。奈良さんは最後に順天生に向けて、「あなたの”弱さ”も、誰かとつながるピースになるかもしれない。場所や人によって短所の意味づけは変わるので、たくさんの世界を見て世界を広げよう。自分の短所も”誰かにとっては意味がある”。」と力強い言葉をかけてくださった。生徒も CFF の活動や海外で支援活動を行うことに強い興味を持ったようだった。

生徒の感想

・初めに行った自己紹介の仕方がとても面白く、楽しかったです！初めてあのようなやり方をし、次、自己紹介をする機会があったら提案してみようと思いました。また、お互いにタメロで話し、名前も呼び捨てで呼び合うというやり方では、お互いの仲を早く深めることができるなと感じ、とてもいいなと思いました。このやり方も始めてで、新しいものをたくさん取り入れることができました。マレーシアでの体験のお話では、私たちが普段当たり前のように受けている教育や病院に行けることなどは無国籍の人々にとっては当たり前ではなく、また、無国籍の方は地球では存在していないものとされてしまうというのを知り、とても心が痛くなりました。CFF について初めて知り、ワークキャンプやスタディーワークに参加してみたいなと思いました。

・留学すること、すごく不安でしたが和らいで前向きになれました。自分の短所が好きになれませんでしたが、だれかのためになると知って心が楽になりました。

写真

トピックコード	306
トピック題名	「獣医療と再生医療 － 動物のお医者さんの最前線」
話題提供者	田島　一樹　先生
所属組織	北里大学　獣医学部　講師
参加生徒数	24 名

トピック内容等

「動物のお医者さん＝獣医師」という言葉を聞くと、かわいい犬や猫を診る姿を思い浮かべる人が多いと思います。でも、実際の獣医師の仕事はそれだけではありません。産業動物を診る人、公務員として衛生や農業の分野で働く人、小動物を診療する人など、大きく三つの分野に分かれています。いわゆる「動物のお医者さん」というイメージは、小動物診療の仕事にあたりますが、北里大学の卒業生の多くは公務員として活躍しているそうです。

小動物診療の現場は、手術の前後のケアや餌やりなど、実はかなり体力を使う仕事です。白衣を着たスマートなイメージとは違い、現場ではブルーカラーに近い面もあるそうです。学生たちは、「やりがいのある小動物診療」か「安定した公務員」か、進路を決めるときに多く悩むといいます。 アメリカでは、獣医学を学ぶ期間が長く、学費も非常に高額です。学生は自分でお金を払いながら一生懸命勉強し、その多くが小動物臨床に進みます。努力が報われ、勤務医でも高い収入を得られるそうです。社会的な評価も高く、まさに専門職としての誇りを持って働いています。

動物は言葉を話せないため、獣医師は多くの検査を通して原因を突き止めていきます。犬は人の言葉や感情ある程度理解し、耳の向きや表情で気持ちを表すこともあります。猫にも同じように表情があり、診療では飼い主との信頼関係がとても大切です。講師の先生は「人間嫌いでは、動物のお医者さんにはなれません」と笑いながら話していました。

先生はまた、眼科の専門医として行っている研究についても紹介してくださいました。たとえば、人間なら移植で治せる“角膜浮腫”という病気は、動物では治すのが難しいそうです。そこで先生は、犬の角膜細胞を世界で初めて培養することに成功しました。今は、iPS 細胞を使って治療の可能性を広げる研究にも取り組んでいます。

「研究は、教科書を書き換えることなんです。」という言葉が印象的でした。未知の病気を明らかにし、未来の医療につなげていく──その姿に、生徒たちは深く引き込まれていました。かわいい動物と触れ合う仕事であると同時に、獣医師は科学を進める研究者でもあるのだと、みんなの見方が変わったようでした。

生徒の感想

・獣医師は動物の病気を見るだけだと思っていましたが、獣医師の免許を持って公務員として働くことが出来ると知り、幅広く働くことが出来ることを知りました。また再生医療を人間だけではなく動物にも転用できるようになったことに驚きました。

・北里の獣医学部について、獣医師のやりがいと大変なところを教えていただきました。獣医師は大きく分けて 3 つほどあるということを知り、とても驚きました。今回参加した理由は獣医師について少し興味があったからなのですが、今回お話を聞いてより興味が湧きました。GW は全部興味のあるトピックに参加しているので、この GW を通して自分の将来についてもっと考えていきたいと思います。

写真

トピックコード	308
トピック題名	「食を通した地域振興の実践」
話題提供者	平口嘉典　先生
所属組織	女子栄養大学　准教授
参加生徒数	5 名

トピック内容等

地域振興について地域の現状（社会、経済、環境）と秋田の女性農業者による地域振興活動と女子栄養大学のゼミでの活動事例が紹介された。秋田の地域振興活動では、交流を重視（販売、体験）し利益だけを追い求めない姿勢と、独自の商品開発『ここにしかないもの』へのこだわりの取り組みが印象的であった。女子栄養大の取り組みでは地域振興のための商品開発のポイントが紹介された。生産者、関係業者との対話が大切であること、『ないものねだり』ではなく『あるものさがし』がポイントである一方で、ヨソモノの視点（地域の人でない）や知らないからこそできること（大学生や高校生の視点）も可能性を広げるポイントであると紹介された。

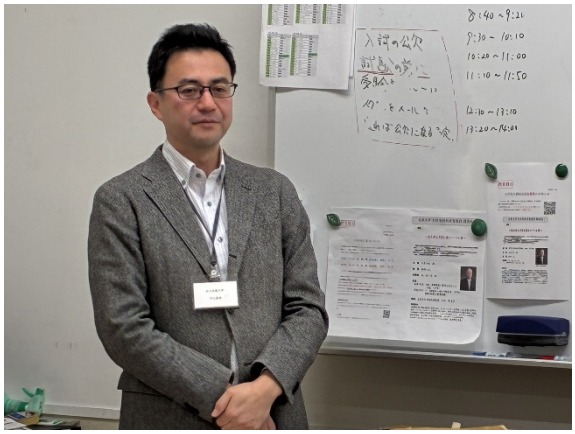
なぜ『食』で地域振興なのか？との問いに参加者からは『生活から切り離せないものだからなじみがあり取り組みやすい』『歴史や文化を反映、特色を出しやすい』など活発に意見が出された。また事前課題である『住んでいる地域、ゆかりのある地域の問題』を食で改善する方法はあるのかを議論し、高齢化や外国人の増加、治安の悪化などの問題が取り上げられた。また平口先生の展望もお話いただいた。情報交換をさせていただいた生徒もおり有意義な時間であった。

生徒の感想

・今回応募した動機は探究コンテストに向けた案のヒントになればと思った事でした。そして実際にとても役立つ講義でした。地域振興の例はネットで調べると見つかるのですが、意外と今見てみると結果を出せなかったり存続してもいなかったり情報が少なかったりで今回のようなちゃんと成功、存続している例を知れるのはとても大きな収穫でした。以前磐田市の方でみよし弁当の磐田版の様な物を振る舞ってもらったのですが、とても美味しかったです。特に一緒に出された知久屋の糀べじあんプリンはお願いして文化祭でも販売しました。みよし弁当も美味しそうでとてもお腹が減ったと同時に、レシピまで知れるのはオリジナリティあって面白かったです。確かに普段沢山の料理を知った気でいて、レパートリーが偏ったり少なかったりな人も多いと思います。まだまだ未知の料理がある事を日常で知れる機会は少ないですしね。商品開発とはよく聞きますがその裏側を知れる機会はあまり無いので聞いていて面白かったです。

・地域振興と食の関係性について初めはよく分からなかったのですが、今回の講義を受けて、食を通じて作る人と食べる人が繋がれることがよく分かりました。今私の住んでいる地域、足立区ならではの高齢化と食の考え方を考えることができてとても貴重な機会でした。

写真



トピックコード	**309**
トピック題名	**「あなたは大人になったら子どもをつくれますか？」**
話題提供者	**今井　伸　先生**
所属組織	**SRH ケアクリニック静岡　院長**
参加生徒数	**15 名**

トピック内容等

「性」について学ぶ機会は保健の授業くらいなのが日本の現状であり、その現状をどうにか打開して健全な形で「性」に関する正しい知識を身につけてもらいたいという今井先生の熱い思いが伝わる講義であった。

様々な写真やユニークな動画で場を和ませながら講義を進めるなど、普段の保健の授業とは一線を画す非常に有意義な内容であった。今井先生が普段勤務されているクリニックの実際にあった症例や患者さんの話など、この講義でしか聞くことのできない大変貴重はお話もあった。講義中の生徒は常に前のめりとなり興味津々の様子で聞き入っていた。質問も積極的にする生徒が多く、常時楽しい雰囲気で受講していたのが印象的である。質問内容も普段は聞くことができないようなものばかりで、ここぞとばかりに質問をしていたのは非常にいい光景であり、これぞ GW といった印象であった。今井先生が執筆された著書を実際に愛読している生徒もおり、最後にはサインまでいただいていて非常に満足のいく講義だったのではないかと思う。

そして、今後の人生の中で確実に自身に生かせるものであり、生徒自身の成長につながると生徒は感じている様子であった。

生徒の感想

・今回のグローバルウィークで私は、相手と自分の体について理解をし、子供を作る時に抱えるリスクについてや子供を作るためにはどういった条件が望ましいか、また相手と自分に負担を背負わせないためにもどういった点に注意するべきなのかについて今井先生の講義を聞くことを通して理解することができました。僕自身今井先生との付き合いは3年目で、再び再開できたことを喜ばしく思いながら講義を聞けたことをとても誇らしく思います。卒業後も OB 枠として講義に参加できたらうれしいです。

・正しい性の知識を学ぶことができてとてもよかった。ネットでは情報はあるがそれが正しい知識だとは言えないため、私自身のことも相手のことも守るために性教育について学ぶことはとても大切だと思った。

写真

トピックコード	310
トピック題名	「「世界は想像より近い。―大学進学から始まるグローバルなキャリアの作り方」」
話題提供者	山本　祐司　先生
所属組織	東京農業大学　応用生物科学部　農芸化学科　学部長・教授
参加生徒数	9 名

トピック内容等

本講座の講師・山本裕司先生は、東京農業大学農芸科学科を卒業後、博士（農芸化学）を取得。米国でポスドク研究員として経験を積み、現在は京都農業大学に勤務している。ビタミン A の生理作用、家族性腫瘍の発症メカニズム、お米の脂肪肝抑制効果など、多岐にわたる研究を行っている。

講座ではまず、海外で学ぶ方法とそのメリットが紹介された。先生はネパール、アメリカ、ロシア、ミャンマー、スリランカ、韓国、西オーストラリアなどで研究活動を展開。アメリカでは結節性硬化症の研究に取り組み、ロシアでは東方経済フォーラムで日本のイチゴをプーチン大統領に紹介することを目標にイチゴ栽培を行った。

ミャンマーでは薬草研究スリランカでは薬草の有効成分の解析の研究、韓国では日本酒づくりにも挑戦した。

大学で学んだ土壌学や微生物学が、こうした多様な現場で大いに役立ったという。学生時代には無駄に思えた学びも、後に思わぬ形でつながることがあると語った。

世界を知る意義は、異文化との出会いを通して新しい価値観を得ること、多様性を理解すること、そして日本の良さを再認識できることにある。

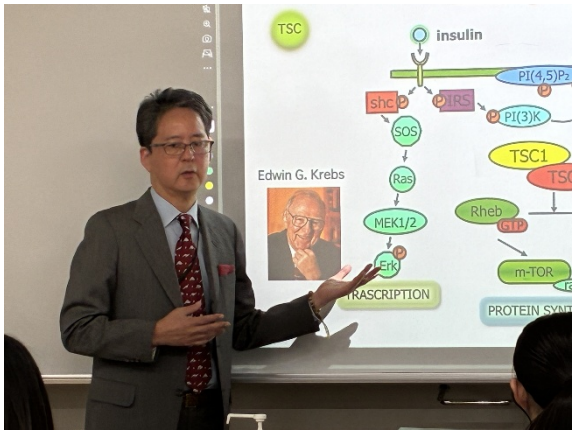
また研究とは、「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざのように、一見無関係な事象が思いがけず結びつく営みであると述べた。高校までは「知識を蓄える場」、大学は「挑戦の場」であるとし、最後に「困難な方を選び、大統領のように働き、王様のように遊び、英語に果敢に挑戦せよ」と生徒にメッセージが送られた。

生徒の感想

・私は高校一年生です。文系に進もうと考えていましたが今日のお話をきいて、農学部に興味を持ちました。理系科目は自分とは縁がないものだと思って、今までは知ろうともしていませんでした。東京農業大学には、興味をそそるような学部がたくさんあり、選択肢が広がったような気がしました。山本先生がおっしゃってくれたように、自分のやりたいことから文理選択していきたいと思います！

・外に行ったときに日本との違いをかなり感じて個人的に学びが多かったと感じたので、改めて自分のためにも色々な国に行ってみたいと思った。年齢的にも今後のことについて考えることが多く、特にやりたいことや夢が明確にないので考えるきっかけになった。

写真



トピックコード	**311**
トピック題名	**「拓本の魅力」**
話題提供者	**岩坪　充雄　先生**
所属組織	**日本近世書道史研究家 拓本技能士(毛筆文化研究)**
参加生徒数	**4 名**

トピック内容等

拓本とは、凹凸のある文字や模様に紙をあてて、上から鉛筆などでこすって写す技法です。碑文を読むための技法ではなく、優れた書を写し取る方法です。拓本は原寸を写し取ることができるので、原碑が壊れたとしても再建が可能となり、優れた書を残す方法、そして、過去から受け継がれた書を学ぶ方法としても、その価値は高いと言えます。拓本を通して、書の達人たちがどのような思いで筆を運んだのか、その一端を知ることができます。

刷毛・ブラシなどほとんどの用具は身近にあるものを使うことができます。今回参加した生徒たちは、各自がタンポという墨を打ち付ける道具を作るところから体験しました。先生にご持参いただいた版木や瓦などに濡らした紙を載せて、丁寧にタンポでたたきながら墨を載せていくと、文字がきれいに浮かび上がります。

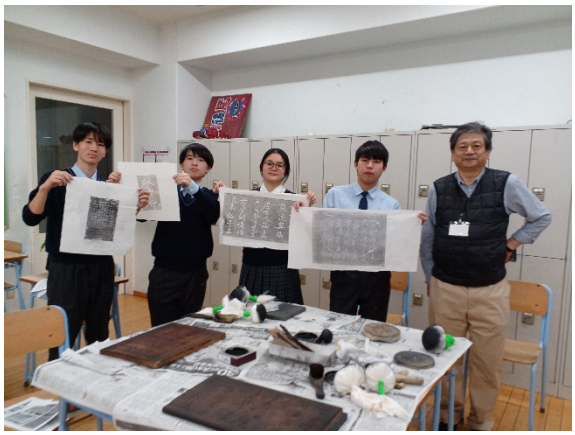
参加した生徒も、わぁっ！と声を上げながら、ちょっとした加減で出来栄えが変わるので幾度も挑戦していました。

生徒の感想

・小難しい話はなしで実際に体験しようって感じが楽しかった。拓本と版画は別物とか、歴史、作り方と色々知らないことが知れてよかった。何より機会がなきゃ出来ないことが出来て楽しかった！作った拓本は机の横と食卓の壁に貼ってます！

・拓本は実寸大の大きさで碑の情報をとれるデジタルな世界になっても正確に研究するためにはなくてはならないものだとわかって、昔からあるのに今でも必要になるのはすごいと思いました。拓本をいっぱい取ることができて非常に楽しくて貴重な経験になりました。

写真



トピックコード	312
トピック題名	「次元の向こうに広がる宇宙 ―― 素粒子から時空の本質をさぐる」
話題提供者	佐々木　伸　先生
所属組織	北里大学理学部　講師
参加生徒数	23 名

トピック内容等

「物質は何からできているのか」考えてみると、水は水分子からできていて、分子は原子からできている。原子は原子核と電子からできていて、原子核は陽子と中性子からできている。陽子と中性子は6種類のクォークからできており、このようにこれ以上分割できないものを素粒子と呼ぶ。同様に力も4種類あり、電磁気力は光子、弱い力はZ・W粒子、強い力はグルーオン、重力は重力子と呼ばれる素粒子を使って伝えている。

しかし、素粒子の種類を数えてみると 17 個もあるし、重力だけよくわからない変な力であった。それらは「非常に小さなヒモの揺れ方の違い」だと考えるとなんとも上手く説明できるのだが、このヒモは3次元空間ではうまく揺れることができない。そこで計算してみると9次元空間+1 時間ならうまい具合に揺れるし、重力についても説明できる。しかし3次元以上の世界を人間の頭では理解できないのでこの先は数学的に計算するしかない。しかも計算すると様々な答えが出てくるため、もしかしたら宇宙は1つだけではないのかもしれない。

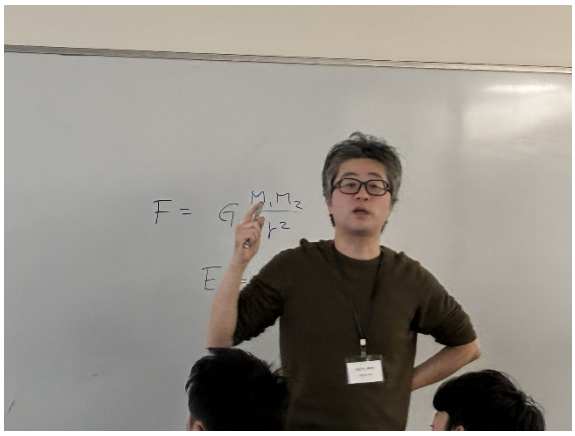
まだまだこの宇宙については分からないことがたくさんあって、（応用価値はあるものの）それを知ったところで何の意味もないのだけれど、知りたいから研究するのが素粒子と宇宙の世界である。素粒子という目に見えない世界の話や、4次元以上の理解すらできない話を伝えるため、自作のアニメーションや、視覚的な資料を多用してくださったので理解の助けになったと思います。理数科の生徒を中心に反応が多くありました。

生徒の感想

・今日は少し難しい宇宙についての話を聞きました。素粒子などのとても小さい物質で人間よりもはるかに大きい宇宙が成り立っていることがわかりすごいと思いました。また、空間に関してのことも教えてくださり、宇宙や世界に関して少し詳しくなることができました。ブラックホールなど、このお話を聞かなければ詳しく知ることができなかったと思うので良い勉強になりました。物理のノーベル賞などは日本人も多く取っていて日本人は物理や宇宙のことが好きで調べて探求することが得意なのかなとも思いました。今回は全体的に宇宙などの難しいことだったのであまり深くは理解することはできませんでしたがお話を聞くことができ、どんな研究をしているのか知ることができてとてもうれしかったです。小さいものが宇宙を作っていて大きいものも小さいものなのかなとも思いました。

・重力が一番力が小さいというのを聞いてそんなわけないと思いましたが、クリップがくっついていくことから本当に小さいんだということがわかり、驚きました。それと講義を聞いていて、四次元や五次元などを理解できるようになってみたいなと思いました。難しくてわからないところも多かったですが新しい発見がたくさんあってとても面白かったです。

写真



トピックコード	**313**
トピック題名	**「コロナを超えて～次の感染症パンデミックに備える感染症内科医師の仕事」**
話題提供者	**藤倉　雄二　先生**
所属組織	**北里大学医学部　教授**
参加生徒数	**8 名**

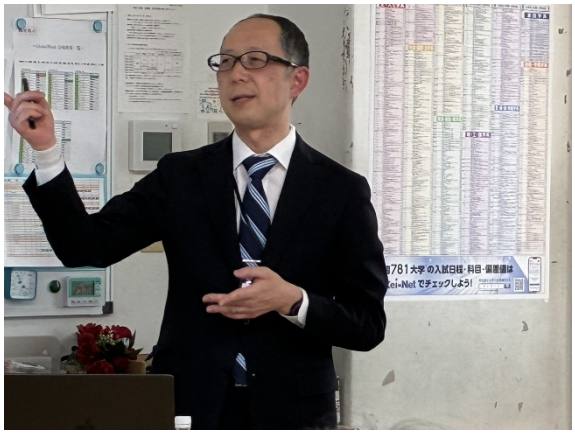
トピック内容等

本講座では、「コロナを超えて～次の感染症パンデミックに備える感染症内科医の仕事～」と題して以下の内容
①～⑤が生徒たちに講義された。
①微生物と感染症についての基礎知識について
②病院における感染症医の役割について
③感染症とそれについての基礎研究について
④世界に存在する感染症について
⑤今後、どのようなパンデミックがおきうるか、である。
講義はわかりやすくかつ興味をひくものであり、多くの生徒が集中して講義を聞いていた。また、話題提供者からの発問にも積極的に答える様子が見られた。講座終了後も、個別に質問する生徒も多く、参加生徒にとっては非常に有意義な時間になったと思われる。

生徒の感想

・感染症内科医の仕事はただ感染症を守るのではなく、病院の対策や感染症の予防なども行っていることが分かりました。私は、学校の探求でワクチンについて調べていて、新たなワクチンの形について調べています。なのでデングの熱の話がとても興味を持てました。蚊がウイルスを媒介して感染を広めるということを聞いて驚きました。そこでスプレーが予防になるということを聞いて、スプレーがワクチンになるのではないかと考えました。自分の探求が深まった気がして面白かったです。
・自分は医療に興味があったので感染症内科の仕事や感染症についてさまざまな説明を聞いてとても興味深いなと感じました。感染症が勃発した時でもそうでないとかでも前線で活躍したり、研究を重ねていったりととても偉大なことをしていると思いました。

写真



トピックコード	**314**
トピック題名	**「発表で緊張しない方法」**
話題提供者	**新谷　優　先生**
所属組織	**法政大学　グローバル教養学部グローバル教養学科　教授**
参加生徒数	**21 名**

トピック内容等

「緊張しなくなる方法を見つけていく」という話題のもと、生徒たちも参加しながら楽しい時間をすごすことができた。2025 年に発表されたばかりの調査方法【PSTI 尺度】を用いながら、男性は他者からの評価を気にする傾向がある、女性は自身で上手くいかないと感じることが要因で発表の際に緊張する傾向にあるなどアンケート結果の報告を受け、生徒たちも「確かに。」と共感している様子が見受けられた。

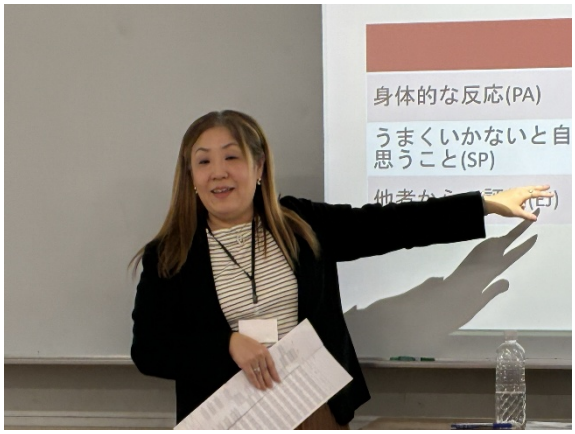
どうしても私たちは発表の際にどうしても評価を気にしてしまいがちだが、「誰のために発表するのか？」それは、自分の評価のためではなく、この発表を聞いた誰かのためになればいい、「全員に感謝されなくてもいい、一人にでも役に立つなら大成功」そう考えれば少し楽になるのでは、とこの場を締めくくってくださった。その後、いくつかの質疑の後、3名の生徒が自分の探究してきたないようについて発表をしてくれた。それぞれが今日の話題をふまえて、緊張せずに発表できていれば最高である。

生徒の感想

・実際にみんなの前で発表することを通して少しの緊張は良いことなんだということと、視点を変えてみんなの役に立つように考えることが大切なのだと思いました。やっぱり自分は発表が得意だし、好きなのだと思いました。限られた時間を自分のために使ってくれてるのだと思い，プレゼントをあげる感覚でしっかりとした発表を続けていきたいです。

・発表はいつもすごく緊張してしまって苦手で、これからも全く緊張しないの無理だと思うけど今回、先生の話を聞いてみて少し緊張する気持ちが和らいだと思います。次発表する時は他者の評価を気にしすぎず、自分が人にそこまで見なれていないって言うことを頭で唱えながら発表に取り組もうと思いました。

写真



トピックコード	**315**
トピック題名	**「立ち止まる勇気」**
話題提供者	**川本　真一　先生**
所属組織	**順天中学高等学校　教諭**
参加生徒数	**21 名**

トピック内容等

内容：「立ち止まる」ことを目的として、いくつかの「自分」についての質問を順に投げかける。
それらをあらかじめ組んでいたグループ内で共有していくことで他者の内面を知り、同時に自分の意見と照らし合わせることでさらに自己理解を深めていく。質問を受け、一旦じっくり考えることが「立ち止まる」ことにつながり、普段自分が何を思い、何を大切にしていきたいのかに改めて目を向けることができる機会となった。
講座内の様子：毎日忙しく次から次へと課されるタスクに慣れきっている生徒たちにとって、「自分」について問われ、思いを巡らす時間は新鮮だったように感じた。それらの時間を皆楽しんでいたし、慈しんでいるように見受けられ、今までにない形で自己の深淵に触れる作業ができていた。

生徒の感想

・立ち止まることって、難しくてなかなかできないなと思っていました。でも、誰かに問われたり、自分で自分に問うてみたりすることで、少しは立ち止まって考えられるんだとわかって、今度からたまには自分で自分に問うてみる時間を作ってみたいなと思いました。
・とても楽しく、様々な問いによって自分に向き合うことができた時間でした。いつものび太君に「聞いて聴いて訊いている」ドラえもんが最高なコーチというのは確かに！と思いました。コーチングとは一緒に目線を合わせることだと知りました。周りの人が悩んでいたり辛そうにしていたら、ついアドバイスや解決策を出してあげたくなると思います。しかし、その心に寄り添うという方法も、その人のコンディションを整えるサポートになるんだと思いました。互いに良い問いを投げかけ合い、「立ち止まる」時間はとても有意義なものになりました。

写真